

## 『永遠のいのち』 ヨハネの福音書 3 章 30～36 節

## 1. 上から来られた方と地から出た者

31 節に「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地のことを話す。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。」とあります。「上から来られる方」とか「天から来られる方」というのは、神が私たちを愛してご自分のもとから遣わして下さった御子イエス・キリストのことを指しています。イエス様は、上から、つまり天から来られた方であり、ひとり子なる神が肉となって、人間としてこの世を生きて下さった救い主なのです。

それではここに「地から出る者は地に属し、地のことを話す。」と言われているのは誰のことなのでしょう。この問いは、これを語っているのは誰か、ということと関係してきます。30 節の終りにも括弧閉じがあり、その括弧の始まりは 27 節です。そこには「ヨハネは答えた。」とありますから、30 節まではバプテスマのヨハネの言葉です。30 節に「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」とある「あの方」とはイエス様、「私」とはバプテスマのヨハネです。そこで一旦括弧が閉じられていますが、別の誰かが登場しているわけではありませんから、31 節以下もバプテスマのヨハネの発言だということになるでしょう。つまり本日の箇所もバプテスマのヨハネの言葉の続きとして訳されているのです。「上から来られる方」と「地から出る者」という対比がなされているのは、イエス様とバプテスマのヨハネのことだということになります。

「上から来られる方」は驚くべきことではないでしょうか。私たちは誰も天に行ったことがないで、そこがどういうところなのかわかりませんが、この方はもともと天におられたので、天上のことがどうなっているのか、その現実を証しすることができるのです。

## 2. 主イエスの証し

イエス様は、もともと天におられたので、天上のことがどうなっているのか、はっきり伝えることができたのです。1 章 18 節には、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」とありますが、ひとり子の神であるイエス様が、神を説き明かされたのです。また 5 章 19～24 節で「まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様にを行うのです。それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。また、これよりも大きなわざを子にお示しになるので、あなたがたは驚くことになります。父が死人をよみがえらせ、いのちを与えられるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子に委ねられました。それは、すべての人が、父を敬うのと同じように、子を敬うようになるためです。子を敬わない者は、子を遣わされた父も敬いません。まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。」とあり、子であるイエスと父なる神との一体性が表現されています。要は、イエス様のなさること、話されることは、父なる神の御心を体現しています。しかし、ここにはもっと驚くべきことが記されてあります。それを受けて 32 節には「この方は見たこと、聞いたことを証しされるが」とあります。イエス様は、ご自身が天において見聞きしたことを語っているのです。

しかし 32 節後半には「だれもその証しを受け入れない。」とあります。イエス様が世に来られ、神の言葉を語り、神の愛を告げ知らせても、人々はそれを信じない、受け入れない、そのことは 1 章 10～11 節に「この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」と語られていました。神のひとり子主

イエスが来て、神の言葉を語り、神の愛を告げ知らせても、人々はそれを受け入れず、信じない、そこに、神の愛に応えようとしないう人間の罪の現実が見つめられています。それは、私たちの回りを見れば一目瞭然でしょう。私たちの回りに、どれだけの人があるの証しを受け入れているのでしょうか。

イエス様の言葉を聞いた者は、それぞれがイエス様の言葉にどう応答するのかが問われているのだと語ろうとしています。イエス様の言葉をみんな受け取らないと言いながら、あなたはどのようにするのかということここでバプテスマのヨハネは問いかけているのです。「そうは言っても現実には厳しい」。そうやって人の視点で絶望しそうになるのです。けれども、イエス様のまなざしはその逆で、「現実には厳しい。でも神はあなたを愛しているよ」と愛で現実を越えるようにうながされました。

私たちが犯しやすい過ちは、神が語ったことを受け入れようとしないうことです。そればかりか、その上に立って判断しようとしています。それは先生が生徒に教えようとしている時、その教えを受け入れないで、それを批判するようなものです。いや、それ以上でしょう。なぜなら、先生も人間である以上、間違えることもあって、時として先生以上に優秀な生徒がいるということもあるからです。しかし、神の場合はそのようなことは絶対にありません。それなのに、人間が神の上に立って、それが正しいか、間違っているのかを、判断しているとしたら、本末転倒もいいところで、そのような態度では、いつになっても神を理解できるはずがありません。被造物である人間にできることは、ただ神の証しを受け入れることしかないのです。なぜなら、この方は「**すべてのものの上におられる**」方だからです。

しかし、そのようなこの世の現実の中で、イエス様の証しを受け入れる者も現れているのです。33 節に「**その証しを受け入れた者は、神が真実であると認める印を押したのである。**」とあります。これは 1 章 11 節の続きの 12～13 節と対応しています。「**しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってもなく、ただ、神によって生まれたのである。**」とあります。イエス様の証しを聞いても受け入れない人々が多い中で、それを信じ、受け入れ、神がひとり子をお与え下さるほどに真実に自分を愛しておられることを確認し、御子イエス・キリストを救い主と信じて、滅びから救われ、「永遠のいのち」を得る者たちが今確かに興されつつあるのです。それは人間の力によることではなくて、1 章 13 節にあったように、神ご自身がその人々を生み出して下さっているのです。

ここに「**印を押した**」とありますが、私たちのところに郵便物が届いた場合、そこに印鑑を押すことを求められます。判子を押すということは「確かに受け取りました」という意味です。一度「**印**」を押してしまうと、後で受け取ってないとは言えません。確かに受け取りましたということ客観的な事実とするために「**印**」を押すのです。つまり、神が真実である、神の真実の御業をイエス様が語る。それをアーメンと受け入れるということは、「**神が真実である**」ことを揺るがないこととして受けとるということです。

キリスト者とは、このイエス様の証しを受け入れた者です。その人は、ただイエス様の言葉が真実であることを確認したというだけでなく、「**神が真実である**」ということ認める「**印**」を押しました。なぜなら、イエス様を遣わされたのはその父なる神であるからです。イエス様を信じて、その初めの頃は、神が真実な方なのかどうかよく分からないこともあります。イエス様を信じたのに、どうして私の人生にこんなことが起こるのかということがありますと、「**神なんていないのではないか**」と思うこともあります。しかし、時間が経てば経つほど、本当に「**神が真実である**」お方であるということが分かってくるものです。

ヨハネは、天から来られた方であるイエス様の語っている証しによってこのようにイエス様を信じて救いにあずかる人が興されていることを見つめて、それを喜んでいて、そして、地から出た者に過ぎない自分は衰えていき、天から来られた方であるイエス様の栄光こそが現れていくことを願っている、そのようにこの箇所を読むことができるのです。

### 3. 私たちの言葉として

しかし、それだけでは終わらないところに、ヨハネの福音書の奥深さがあり、魅力があります。30 節の終りに括弧閉じを置いています。31 節の冒頭には括弧がありません。つまり、ヨハネの言葉ではなくて、この福音書を書いた人の言葉として訳していると考えられることもできます。それはこの福音書が書かれ、読まれた教会の思いです。なぜなら、そのように読むことによってこの箇所は私たちの言葉にもなるからです。教会の言葉、私たちの言葉としてここを読むとしたら、そこに何が現れて来るのでしょうか。

31 節後半に「**地から出る者は地に属し、地のことを話す。**」とあります。それは私たちのこと、教会のことと解釈もできます。私たちは地上を生きており、人間の言葉を語っています。私たちは天から来られた方であるイエス様ではない、地上を生きる人間ですから、神の言葉を語るなどできないのです。しかしイエス様が天から来て下さり、人間となってこの世を生きて下さり、父なる神の私たちへの愛を、御言葉と、そして十字架の死と復活という御業によって証しし、示して下さいました。その証しを受け入れたのが私たち教会です。教会に連なっている私たちは、イエス様の証しを信じて、神が真実であることを確認したのです。つまり神がひとり子を与えて下さるほどの真実な愛を私たちに注いで下さっていることを信じる信仰を告白し、洗礼を受けてイエス様の救いにあずかり、御子を信じる者として生きています。それによって私たちは「永遠のいのち」を得ています。肉体の死によって失われることのない「永遠のいのち」をこの世において既に生き始めており、世の終わりにそれが完成するという約束を与えられているのです。

### 4. 神のことば

34~35 節に「**神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである。父は御子を愛しておられ、その手にすべてをお与えになった。**」とあります。「**神が遣わした方は、神のことばを語られる。**」は、イエス・キリストのことばです。イエス様は神から遣わされた方なので、「神のことば」を語られます。なぜなら、「**神が御霊を限りなくお与えになるから**」です。これはどういうことかと言うと、一般に預言者と呼ばれる人は「神のことば」を語りますが、どのようにして語るのかと言うと、神の御霊、聖霊に導かれてです。預言者は自分が語りたことではなく、神が語るようにと導いてくださっていることを語るのです。しかし、私たちが「神のことば」を語るのと、イエス様が語るのとでは少し違いがあります。確かに私たちも御霊に導かれて語っていますが、限界があるのです。そのために祈り、聖書をよく調べ、神が語っていることはこういうことだと確信をもって語りますが、時々わからないということや、間違っ理解することがあります。しかし、イエス様はそういうことがありません。34 節は、以前の聖書では「**神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。**」となっています。イエス様は完全に「神のことば」を語ることができました。なぜなら、神が御霊を無限に与えられたからです。

これは、「神のことば」を語る私たちがいつも目指していることです。説教者（預言者）は、自分の思いや考えを語るのではなく、神から預かった言葉を、神からのことばとして語らなければならないということです。その「神のことば」こそ聖書です。イエス様が地上にいた時は、イエス様からじかに「神のことば」を聞くことができましたが、イエス様が昇天して天に行かれた後は、神は私たち人間の救いに関する御心を、この聖書に啓示して下さいました。ですから、神の御心のすべては、この聖書の中に書かれてあるのです。聖書が神からの啓示であると言えるのは、これが神の御霊である聖霊によって書かれたものだからです。テモテ第二の手紙 3 章 16 節に、「**聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。**」と書かれてある通りです。聖書こそ 100% 神の御霊によって書かれた書であり、イエス様が地上にいた時に語られた時と同じ権威をもった「神のことば」にほかなりません。だから説教者は、この「神のことば」である聖書を語らなければならないのです。

しかし、それは説教者だけではありません。その説教を聞く人も同じで、それを説教者のことばとしてで

はなく、また人間のことばとしてではなく、「**神のことば**」として聴かなければなりません。あなたは、「**神のことば**」である聖書のことばをどのように受け止めておられるのでしょうか。聖書のことばを「**神のことば**」として受け止め、そこに信頼をおいていますか。聖書のことばをそのように受け止めるなら、あなたの人生にもこの豊かな**神**の恵みが注がれるのです。

## 5. 永遠のいのち

そして、36 節「**御子を信じる者は永遠のいのちを持っているが、御子に聞き従わない者はいのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。**」は、これまで語ってきたことの結論です。御子イエスを信じる者には、今、この地上で生きている時点で、すでに「**永遠のいのち**」が与えられているのです。「**永遠のいのち**」は、死後に与えられるものだけではなく、信じた時から体験できる**神**との生きた交わりであり、**神**の臨在であるからです。

それはまた、この御子イエスを信じない者に対する霊的現実でもあります。ここには、「**御子に聞き従わない者はいのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。**」とあります。それは死後のことだけでなく、今すでに始まっているのです。いくら「**神のことば**」を聞き、イエス・キリストの福音を聞いても、それに従う意志がない人には、永遠の祝福にあずかることがないというだけでなく、今も「**神の怒り**」がその上にとどまっているのです。**神**との生ける交わりがありません。霊的に死んでいるのです。しかし、あわれみ豊かな**神**は、その死の原因である罪を取り除くために、御子イエスを遣わしてくださいました。この方を信じる者はひとりも滅びないで、「**永遠のいのち**」を持つのです。

あなたは、この「**永遠のいのち**」を持っておられますか。それとも、まだ「**神の怒り**」がとどまっているのでしょうか。あなたも御子イエスを信じてください。信じて、この方の中にしっかりとどまってください。それが、**神**が御子をこの世に遣わされた目的だったのです。

しかし、その救いは、私たちがそれを喜ぶためにのみ与えられているわけではありません。**神**が私たちを愛して、この救いを与えて下さったのは、私たちが、自分の受けたこの**神**の愛を、他の人にも証ししていくためです。36 節に「**御子を信じる者は永遠のいのちを持っているが、御子に聞き従わない者はいのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。**」という歩みをしている世の人々に、3 章 16 節の「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」という福音を証しし、伝えていく使命を、**神**は私たちに、教会に与え、私たちを、教会を、世へと遣わしているのです。だから私たちは、私たちが見たこと、聞いたことを、私たちに与えられているイエス様による**神**の愛、救いの恵みを、証ししていくのです。私たちは地に属する者ですから、人間のつたない言葉しか語れません。だから、誰もその証しを受け入れないという現実にも直面することもあります。しかし、**神**が私たちのつたない証しを用いて下さる時に、その証しを受け入れ、**神**の真実な愛を確認して御子を信じる人が興されていくのです。そこにおいて鍵となるのが 34 節ので「**神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである。**」という言葉です。これはイエス様のことであると同時に、私たちのこと、教会のことです。**神**は**聖霊**を私たちに、限りなく与えて下さるのです。その**聖霊**によって私たちは、**神**によってこの世へと遣わされ、**神**の言葉を語っていくのです。**聖霊**の働きによって私たちも、イエス様ご自身が証しして下さった**神**の愛を証ししていくことができるのです。

33 節で「**その証しを受け入れた者は、神が真実であると認める印を押したのである。**」とヨハネは語りました。**神**の言葉を聞くときに、そこに確かに受け取った、真実を私たちは味わうのです。それは、確かに私を生かす言葉となるのです。このイエス様の言葉は上からの言葉、**神**の国に私たちを新しく生かす言葉です。この言葉によって、私たちは、**神**がいかに真実なお方であるかを知ることができるのです。そして、イエス様の言葉の中に、私たちは慰めと希望を見出しているのです。